

令和4年8月1日発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
Tel 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

今月の題字
近藤雄一郎さん

(みどり市大間々町)
群馬の代表銘酒『赤城山』の蔵元・近藤酒造さんとは先々代からお付き合い。6代目社長の雄一郎さんもお囃子保存会の仲間です。

虹の架橋

星野富弘・花の詩画展

in さくらもーる

八月五日から十四日まで、大間々ショッピングセンターさくらもーるで『星野富弘・花の詩画展』を開催いたします。詩画展は富弘美術館を囲む会群馬県支部の会員が中心となって開催するもので、さくらもーるでの開催は昨年に続き二回目となります。今回は小・中・高等学校が夏休み中ということもあり、展示する二十数点の作品(複製画)は、星野富弘さんの代表作の他、親子や家族で楽しくご覧いただける作品や今の世相を反映した作品を展示します。



2022年
8月5日(金)~14日(日) 入場無料
午前10時~午後6時 (最終日は午後5時まで)
主 催: 富弘美術館 大間々市教育委員会
協 賛: 富弘美術館 大間々市教育委員会
共 催: 富弘美術館 大間々市教育委員会
お問い合わせ: 富弘美術館 0277-73-1212

みどり市東町出身の星野富弘さんの詩画を観ていると、私たちが忘れていた故郷の自然の美しさに気づき、生まれ育った町や村が好きになり、「生きる喜び、いのちの輝き」を実感することが出来ます。平成三年に開館した富弘美術館は、昨年開館三十周年を迎え、来場者も七百万人を超えました。「やさしさ」にいつでも逢える美術館」として全国から多くの来場者を迎える富弘美術館は、みどり市の貴重な財産であると共に、みどり市民、群馬県民の大きな誇りでもあります。私たちは富弘作品の素晴らしさを深く知り、多くの人たちに伝えていく役目を担っていると思います。今回の詩画展がその一助になれば幸いです。今回の詩画展開催にあたり、星野富弘さんから作品を貸していただき、富弘美術館、大間々高校美術部、さくらもーるテナント会のご協力をいただき、みどり市教育委員会のご後援をいただいて開催します。皆様のご来場をお待ちしています。

凡事徹底

小耳にはさんだ
いい話
(文責・靖)
《324》

『凡事徹底』ー前橋育英高校野球部で教え続けていることーという本が出版されました。「はじめに」で前橋育英野球部の荒井直樹監督は「私が書けるのは、ほんの些細なことだ。だがその小さな出来事の積み重ねが今に辿り着いたのは間違いではない。『当たり前』を当然と考えて疎かにするのではなく、『当たり前』だからこそ徹する、しかも誰より、丁寧に、しぶとく、」と書かれていました。

今から二十三年前、荒井監督が前橋育英の指導者になり、指導方針に迷っていた頃、たまたま読んだ雑誌で、イエローハット創業者の鍵山秀三郎さんの『凡事徹底』という言葉に出会ったそうです。「誰にもできることを、誰にもできないくらい徹底してやること」という言葉に「まさにその通り」と感服した荒井監督は、野球の中で最も大事で、すべての要素が含まれているキャッチボールを徹底的に指導することにしました。そして「何度言ったらわかるんだ」ではなく、同じことを表情を変えずに言い続けました。甲子園で優勝する前は「あのやり方では絶対ダメだ」、「怒らないから勝てない」と言われ続けてきましたが、

八年前に初優勝してから「凡事徹底の発想がいい」「選手を信じる指導者が伸びる」と称賛されるようになりました。荒井監督は「何が正解かはわからない。だが、選手たちに求め、自らに掲げるのは、誰かを超越する、この人に負けないで、自分を超えろ」ということ。そう考えれば、きつと少しずつ、たとえ1ミリでも成長できるはずだ」と語っています。「指導者として私にできることは、寄り添うこと」という言葉

は、荒井監督の人の柄を端的に表していると思います。荒井監督と鍵山秀三郎さんが初めて会ったのは、前橋育英が優勝した翌年の二月、鍵山さんが大間々へお越しになった日のことでした。「凡事徹底」を実践し続け、多くの人たちに感動と共感を与え続けるお二人の話を目の前で聞いていた私たちも深く感動し、「凡事徹底」を唱えるだけでなく実践しようと思いました。



七月十六日、「要害山を愛する会」のメンバーが集まり、アジサイの花がら摘みと下草刈りを実施しました。朝八時、要害山の展望台に集まったメンバーは約四十人。それぞれが草刈機や草刈り鎌を持ちより、慣れた手つきで作業を進めていきました。秋には要害神社の参道にアジサイを植える計画です。要害山を愛する会は来年で結成二十年を迎えます。三十年後、四十年後には今回の参加者は誰も生きていないかもしれませんが、要害山が桜、花桃、モミジ、アジサイの名所になっっているかもしれません。

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の絵《324》

野口智子さん『千代の湯』



水彩画家の野口智子さんが大間々の古き良き時代の建物や風景を何枚も描いてくれました。大間々で最後まで営業を続けていた『千代の湯』の絵も昭和レトロの雰囲気が出ています。『千代の湯』は、明治三十七年に刊行された大間々の街並みの地図にも名前が載っているほどの老舗の銭湯でしたが残念ながら廃業し、六月には建物も解体されてしまいました。昔、近所の人から「やっちゃんのお母さんは、この銭湯でいつもお姑さんの背中を流してたよ」という話を聞いたことがあります。私の母もこの銭湯と同じ「千代」という名前でした。

靖ちゃん日記

令和四年七月十六日(土)
四区のお囃子保存会の練習日だった。平日は子供たちで土曜は大人の練習日。三年ぶりに山車の上で叩いた。笛と太鼓の音を聞く自然に手が動くのが嬉しい。さんてこ、きり、たま、にんば、おうま、きりん、神田囃子、縮菊で叩いた。曲と曲の間で三回間違えた。本番までには完璧にできると思ってた。太鼓の後、山車小屋でビールを飲んだ。みどり市になる前の十五年間、祇園祭の仮装大会があり、四区は十回優勝した。お囃子保存会の指導者たち仮装の主要メンバーだった。毎晩、山車小屋に集まり、衣装を作り、一回しを覚え、フラメンコを習って、ハンドベルも練習した。白鳥の湖の年は、レオタードに網タイツ、頭の飾りはレースのパンティエをかぶった。天使に変わった年は、長髪のカツラをかぶり、胸に風船を入れた。天使というより天使だった。



虹の架橋 検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十五号は令和四年九月一日(木)発行予定です。

やっちゃんの似顔絵提供…ひさかさん